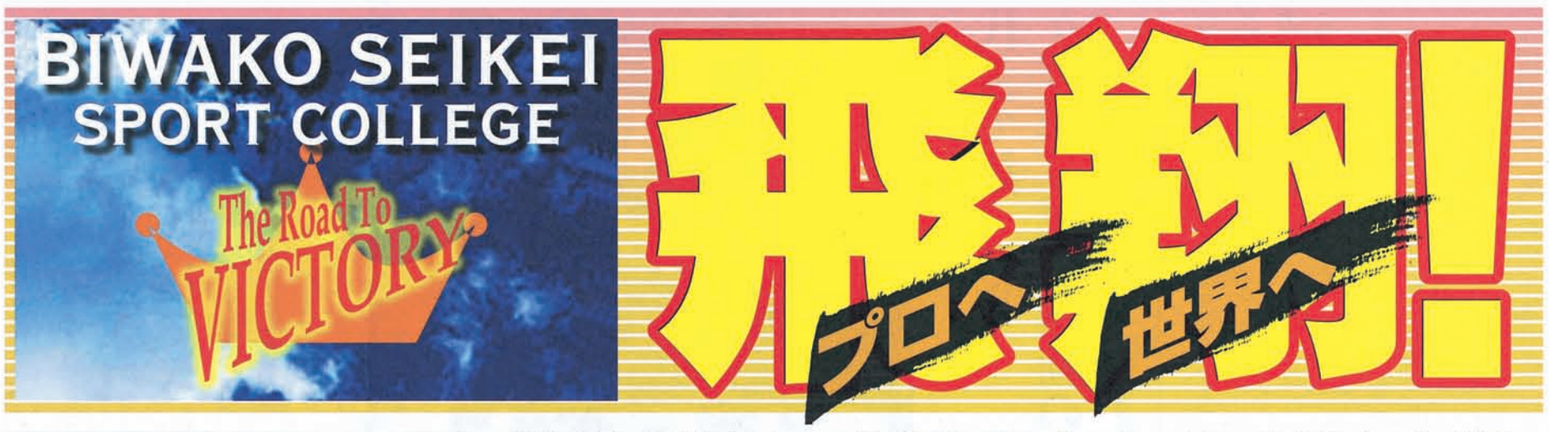
2006 Vol. 2
THE BSSC JOURNAL
通巻2号 2006年10月10日発行

THE BSSC JOURNAL
びわこ成蹊スポーツ大学新聞 Biwako Seikei Sport College

びわこ成蹊スポーツ大学の「今」を伝える
© THE BSSC JOURNAL 編集部
発行＝びわこ成蹊スポーツ大学 メディア研究会
〒520-0503 大津市北比良1204番地
http://www.bsscjournal.net/



開学4年目にして「ヴィクトリー・ロード」が“びわこブルー”のスクールカラーに染まり始め、いよいよ「プロ」へ「世界」へと、飛翔を開始――。サッカー部のエースストライカー・近藤岳登選手がJリーグ・ヴィッセル神戸とプロ契約が成立し入団、水泳・シンクロの青木愛選手は横浜W杯（9月）のチームで銀メダルを獲得すれば、カヌーでも竹中一生選手がW杯（中国、8月）の3種目で入賞。さらにバトントワリング世界選手権（イタリア、8月）では河津修一選手が男子シニアで、田中有紗選手がチームでともに銀メダルを手にした。河津選手は4年連続のメダル獲得の快挙だった。（2―3面に詳報）

近藤 岳登（生涯・4）	Jリーグヴィッセル神戸 プロ契約入団決定
第11回シンクロナイズドスイミングW杯06	
青木 愛（競技・3）	チーム　2位
カヌーフラットウォーターレーシングW杯第3戦	
竹中 一生（競技・3）	カナディアン・フォア500m4位、同1000m4位、同ペア 1000m 5位、同シングル 1000m9位
第27回世界バトントワリング選手権大会	
河津 修一（競技・4）	男子シニア　2位
田中 有紗（競技・2）	チーム　2位

（カッコ内は学科名、数字は回生）

サッカー近藤 Jリーグ・神戸入団決定
シンクロ青木 W杯チームで銀メダル

バトン河津 4年連続メダル 田中も銀
カヌー竹中 W杯3種目で入賞

長い手足（身長173cm）を活かし、日本の銀メダル獲得に貢献した青木愛選手（正面右）＝毎日新聞社提供

教員合格 5人

就職戦線

開学以来初となる就職活動は、内定第1号を出した2月から半年余りで一般企業と公務員の内定者数は、83人（10月10日現在）まで増え、教職志望者を除く就職率は47％を超えた。また教員採用試験では京都府・小学校に松井篤志君（園山ゼミ）を第一号に計5人（ほかに補欠合格1＝愛知・中学校＝同日現在）が合格＝別表。わが国初のスポーツ大学が初めて残した教員合格実績としては、上出来のスタートとなった。

一般・公務員 就職率47％越す

志望進路は全4回生264人のうち、一般企業が165人（62・5％）、教員80人（30・3％）、公務員9人（3・4％）、進学7人（2・7％）、その他3人（1・1％）＝いずれも06年4月調査。

これに対して一般企業と公務員（警察・消防など）への内定者は83人、内定先は重複者がいるため118企業・団体、このうちスポーツ関連企業・団体は37社、31・4％。公務員は警察官7人（滋賀県警4人、大阪府警2人、茨城・福井県警各1＝重複あり）と消防官2人（高岡、富山＝同）。この結果、同日現在の教員志望者を除く一般企業と公務員への就職率は47・7％。

また、厳しい関門が予想された教員採用試験の一次試験は滋賀、愛知、兵庫などで計10人が突破。このうち50％の5人が合格となったが、教育実習の履修者数・約180人を考慮すると、本学の教職志望者にとっては、やはり「狭き門」であることを示している。

就職課では、「一般企業からの求人状況は景気回復で増え続けており、未内定者でも今から本気で就職活動をすれば、まだ間に合う」と、秋季採用を目指す企業36社（予定）参加の「学内企業セミナー」を10月19日に学内で開催する。＝小田康人

壁にズラリと貼り出された求人票を前に、矢路就職課長（中央）から説明を受ける4回生たち

教員採用試験合格者（10月10日現在、発表順）

松井　敦志	京都府	小学校
河本　孝弘	京都府	高校
西川　寛子	滋賀県	盲・聾・養護
岩宮由起子	滋賀県	盲・聾・養護
大井　雪乃	愛知県	中学校

就職課長に聞く

来春、初の卒業を前に1期生には就職という大きな課題が残っている。そして今、その就職活動が山場に差し掛かっている。現在の内定状況や未定者などを矢路歳明・就職課長に聞いた。

今の内定状況に、満足しているか

矢路就職課長　正直に言うとまだまだ満足はしていない。他の大学に比べても少ないし、今の時期を考えても少ないと思う。ただし、ウチの大学は多くの学生が教員採用試験を受けるため、まだ本腰を入れて就職活動をしていない学生もいる。これは仕方のない事だから、他の大学と比べても同じ条件ではないので一概には比較できない。

未内定者へのアドバイス、秋採用への対応は

矢路就職課長　まだ決まっていない者に言えることは「本気でする」ということ。秋採用を目指して、新しい気持ちで取り組んでほしい。就職活動をしていた学生は今までの経験を活かして欲しい。まだまだ間に合います。

今後、就職を目指す3年生以下の学生は何をすればいいか。

矢路就職課長　多くの選択肢の中からまずは会社や仕事の内容に興味を持つこと。インターンシップを経て、何となくわかった時点で10月からのセミナーへ臨む。数でいえば10～20は行って欲しい。そこで業種、職種を理解して向き不向きを見極めて欲しい。

最後に就職課長として学生に言いたいことがあれば。

矢路就職課長　私が企業側ならウチの学生は採用したい。人格的にも良い学生がたくさんいて、他大学などと比較しても劣っていない。必死になれば負けることはない。自信をもってやってください。

サッカー天皇杯 2年連続3回戦へ

第86回天皇杯全日本サッカー選手権が開幕、滋賀県代表の本学サッカー部は2回戦で、鹿屋体育大（鹿児島）を3―0で破り、2年連続の3回戦進出を決めた。

1回戦で福井工大（福井）を4―1で退けた余勢を駆って、2回戦は、「Jリーグチームとの対戦を目標にプラン通りの試合運びが出来た」と松田保監督が言うように、格上の相手に堅い守備で完封し、好機を確実に得点しての快勝だった。

前半35分、鋭い速攻でファウルを誘い、得たPKを近藤岳登選手がゴール右隅にぶち込む。J2神戸入団が決まったエースの先制点に、チームは勢いづいた。後半3分に玉垣光滋選手が追加点を奪い、同39分には再び近藤選手のゴールで突き放した。3回戦は10月8日、J2愛媛FCと対戦。

◇サッカー天皇杯◇
▽一回戦（9月17日、皇子山）びわスポ大4（3―0、1―1）1福井工大▽得点者【び】玉垣、坂井、近藤2
▽二回戦（9月23日・金沢市民）びわスポ大3（1―0、2―0）0鹿屋体大▽得点者【び】近藤2（PK1）玉垣

びわこ駅伝 2年連続本大会へ

「びわ湖大学駅伝」関西地区予選で陸上部男子駅伝チームが2年連続2度目の本大会出場を決めた。地元滋賀からただ1校の出場、本学敷地沿いの国道161号線がコースとあって本大会（11月18日）では、選手・応援とも力が入りそうだ。

◇**びわ湖大学駅伝**（第68回関西学生対校駅伝兼西日本大学招待）予選会（9月4日・西京極）▽総合成績（上位8人の合計タイム）①京大2時間5分20秒96②阪大③和歌山大④天理大⑤同大⑥京都創成大⑦びわこ成蹊スポーツ大2時間9分22秒18（中田、熊田、中西、杉山、遊津、大八木、椋、水谷、上田、炭本）

◇**体操**◇**第60回全日本学生体操競技選手権大会**（全日本インカレ、8月9日、東京・町田市立総合体育館）西日本インカレ個人ベスト8に入選した小井手和選手（3回生）が初出場を果たし、女子2部で個人総合45位。小井手和選手「メンタル面では負けてなかった。もっと技に磨きをかけて次は上位を目指したい」（斎）

湖風

「若さ」は武器だ。メディア各社による世論調査は、安部新内閣への支持率がどれも60％超だと伝え、理由の過半数が戦後生まれ宰相の「若さ」を挙げている。メディアに露出する姿や言葉は、どこか爽快さがにじむ。が、「若さ」は時には負の要因も引き起こす両刃の剣でもある▼ひるがえって、わが「びわこ成蹊スポーツ大学」にも、間違いなく「若さ」がある。「わが国初のスポーツ大学」は開学から4年、来春には記念すべき初の卒業生が、社会へと巣立つ。開学以来、部活などのキャンパスライフを初め、就職活動を含めた様々な場面で、「先輩がいない」「知名度が低い」といった、「若さ」ゆえの壁に突き当たってきた▼逆にそのデメリットをメリットにも変えることができる。それが「若さ」の武器だ。「若い」「初めて」を活用し、努力しだいでは新しい歴史をも、自分たちの手で創造できる。何十年もの歴史を持つた伝統校であれば、並大抵なことではない▼そう考えると大学でも「若さ」は、あらゆる場面で大きな武器に違いない。「本邦初」というスポーツの新たな地平をどこまで切り開き、「スポーツ大学らしさ」を、どこまで実現させてきたかを自問自答しようではないか。まだまだ本学の歴史は始まったばかり。教授陣を先頭に、学生たちのチャレンジ精神が求められている（斎）

冬来たる…
行こう！
モリスポ・スノカン

びわこ成蹊スポーツ大学生限定
学生証提示で特別割引有り!!
※ご精算前に必ず学生証をご提示ください。

モリヤマスポーツ本店
守山市吉高町13
☎077-581-2000
営10:00～22:00
（ウィンターシーズンは無休）

モリヤマスポーツ京都店
京都市伏見区横大路下三栖城ノ前町２１－１
☎075-623-1000
営10:00～22:00
（ウィンターシーズンは無休）
※Boards ONLY

モリヤマスポーツスノーカントリー店
池田市神田2-18-3
☎072-751-3000
営10:00～22:00
（ウィンターシーズンは無休）

モリヤマスポーツ東大阪店
東大阪市菱江2-1-28
☎0729-65-3000
営10:00～22:00
（ウィンターシーズンは無休）

www.morispo.co.jp

Photo by Greg Von Doersten

SINCE 1975
mont·bell
地球と遊ぶ、
時間をつくろう。
もっともっと自然の中へ出かけませんか。
地球の上には、
たくさんの驚きと発見があります。
まだ見ぬフィールドへ、まだ見ぬ時間へ。
その入り口にはモンベルがあります。

『2006-2007秋冬 クロージングカタログ』が完成しました。
ご請求は下記ウェブサイトから、またはお電話にて承ります。
（1冊300円/送料別）

■ アウトドア用品は、豊富な品揃えのモンベル直営店「モンベルクラブ・ショップ」へ
全国に42店舗（今秋オープン含む）。皆さまのご来店をお待ちしています！
モンベルクラブ南草津店&F.O.店 滋賀県草津市野路1-17-2 フェリエ南草津2F TEL/077-566-6385
モンベルクラブ京都店 京都市中京区新京極通蛸薬師 下ル東側町530 TEL/075-223-4568
モンベルクラブGARE店 大阪市北区梅田3-2-135 GARE WEST 101 TEL/06-6346-7544
お問い合わせ：モンベル コンシューマ・サービス 0088(22)0031 または 06(6536)5740
http://www.montbell.com

人間探訪

強い意志力で激しく生きる

数々の名選手を育てた 松田保 教授

サッカー界で「松田保・監督」といえば、守山高と守山北高を全国選手権で2度の4強入りへと導いた、名将として有名。また、W杯で活躍し、海外へも進出した小野伸二や稲本潤一両選手を、U―15（15歳以下）からU―17（17歳同）日本代表として一貫指導、95年にはU―17世界選手権（エクアドル）監督。「アジアの壁」井原正巳選手を育てた事でも、広く知られている。

その「松田保・監督」が今掲げる最大の目標と夢は、「サッカーで大学日本一」を目指すこと。また、そこから世界のファンタジスタを作りたい」である。

「サッカー大学日本一」。少なくない名選手を育ててきた監督だからこそ、とても現実味がある。しかし、名選手を多く育ててきた名将だからこそ浮き彫りに出来る、今の大学生と同年代のプロ選手との差は、どこにあるのだろうか。

たとえばメンタル面。「うちの学生の技術はまず普通程度だが、モチベーションだけは高い。同時に、惜しむらくはコンプレックスというか、劣等感が足を引っ張っている。強くなりたいという気持ちばかりが強くて、技術面ばかりを向上させようとしている。サッカーの有名高卒じゃないから、高校で一流選手じゃなかったから…なんて気持ちは要らない。

大切なのは精神面。もっと本気で、自分の全身全霊をかけて立ち向かわなければならない」と、言い切った。

上に行くものと行かないものの違いは、「意志力」の違いだとも表現する。人間は妥協してしまう生き物で、その妥協により、自分の限界を決めてしまう。そうなると、もう前には進めなくなる。「松田保・監督」が求め止まないのは、もっと野性味があって、激しく生きることのできる人間のようにみえる。

「最近はそんな学生が減少しつつある。自分の記録を更新しないのは罪である。高い向上心がなければ目標の達成などできるはずが無い」と。

「サッカー大学日本一」とともに抱き続ける目標、ファンタジスタ建設。いわばサッカーの理想郷への青写真は、長らく高校監督を引退後の姿としてあたためてきたもの。守山市で指導者の養成やキッズからの一貫指導を行うためのスポーツクラブの設立に向けて地道な準備を進め、00年にはS級指導ライセンスも取得した。そんな折に、大学設立のための準備に誘われ、ファンタジスタ建設の舞台を、「わが国初のスポーツ大学」に置き換えることを決意したのだった。

「松田保・監督」の、果てしない夢への挑戦は、まだまだ続く。＝山田優子

まつだ・たもつ　滋賀県近江八幡市出身、金沢大学教育学部特別体育学科卒。03年、滋賀県サッカー協会副会長・技術委員長に就任。Jリーグ入りを目指して05年に発足した滋賀FCにも準備委員会スタッフとして関わる。＝写真右

比良から世界へ、大切な国際経験

テニス・フェドカップ日本代表監督 植田実 助教授

男子のデビスカップと女子のフェドカップはテニスの国別対抗戦で、いわばテニスのワールドカップ。そのフェドカップ日本代表監督を務めるのが、植田実助教授である。アテネ五輪の女子代表監督でもあり、今、まさに日本テニス界を牽引している現役監督が、わが校の教壇に立っているのだ。

「自分のやってきたことを何らかの形にしたい。指導者として、やる気のある若者に伝えたい」。02年から2年間、JOCスポーツ在外研究者として、世界の最強国の一角であるスペインにコーチ留学を果たして帰国後、その強い気持ちが本学に来ることを決断させ、05年助教授に就任した。04年からはほぼ同時にフェド監督として、世界中を飛び回る生活が始まった。

テニスと中学のときに出会って以来、日本のトップを歩んできた。名手の指導を経験してコーチングに魅力を感じ、指導者としての道を決意。98年アジア大会では日本代表監督までキャリアを積んだものの01年、朝日生命の突然の廃部に見舞われた。

が、タイミング良くスペイン留学の機会に恵まれ、「海外の経験を次の世代に伝えることで、自分の世代の上を行くような指導者を育成したい」と願っての教壇であり、フェド監督なのだ。

具体的な方法論としては、「練習において量と質があれば、選手は質を求めるもの。しかし、質を高めるためには、絶対的な量が必要。身体で覚えた上に理論があり、方法がある。身体に染み付いていなければ、瞬間的に出てこない」。豊富な経験から裏付けされた理論だ。

また、「今のコーチの問題点は、海外生活の経験が少ないこと。コーチ自身が外国と競うという自覚が大切。コーチのモチベーションは選手のモチベーションに必ずつながる」と指摘する。さらに「コーチ自身が、積極的に外国に出ていき、自分の考えや理論を試す。そこで測った世界のトップとの距離や感じ取った感覚は必ず財産になる。外国に飛び出し、冒険することで自分の幅を広げて欲しい」。

大学ではテニス実技の他、コーチング技術、コーチング演習などの授業を受け持つ。目指すのは、「世界に通じる指導者の育成」だ。

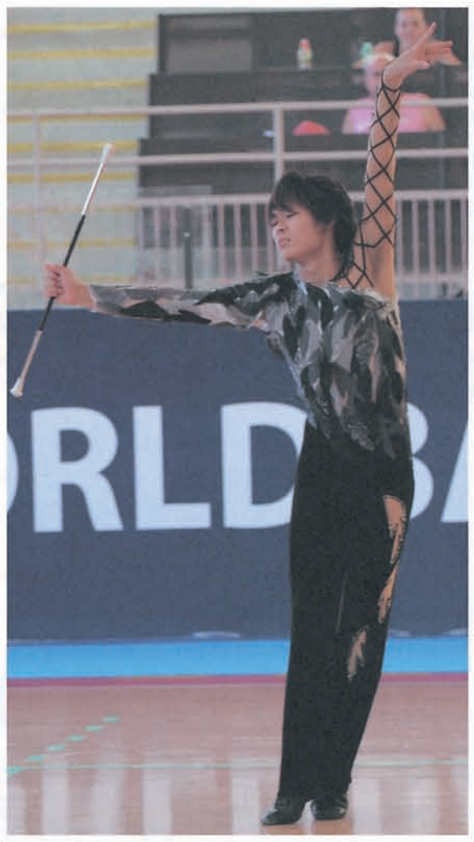
「比良から世界へ」――学生にはそれを期待している。＝千田遼平

うえだ・みのる　福岡県北九州市出身。筑波大卒後、朝日生命で7年間の選手生活を送り、北京アジア大会女子、デ杯日本、ジュニア日本の各代表コーチとして活躍。04年アテネ五輪監督のあと現在、フェデレーションカップ日本代表監督。05年4月から現職。

河津 修一（競技スポーツ学科4回生）

完璧を意識し過ぎて銀

第27回世界バトントワリング選手権（8月3～6日、伊）



男子シニア予選で最高点をマーク、金メダルの期待が高まった。しかし、決勝ではわずかの差で2位。3年前の第24回大会から同種目で3年連続3位を占め、前回大会の1位が不参加で抜けたこともあり、「今年こそ優勝を」と周囲の期待も大きかった。

その期待通り、予選では演技を終えるまで集中力を切らさなかった。ところが、決勝では優勝を強く意識しすぎたのか「演技を完璧にという、思い入れが強すぎたのだろう、予想外のところでしたドロップ（バトンを落とすミス）から立ち直れなかった」というが、その口調は暗くなく、むしろ「今後の課題が見えてきた。精神面を強化したい」といった。更なる躍進へと技と心を磨き続ける。＝大西亮暢

かわず・しゅういち／大阪府立藤井寺高卒。水野啓子バトンスクール所属。主な大会成績。03、04、05年世界バトントワリング選手権大会、個人男子シニア　第3位。05年世界バトントワリング選手権大会、ペアシニア金メダル。

田中有紗（競技スポーツ学科2回生）

演技に満足、バトン普及へ

所属する立命館大学立命館バトンチーム（日本代表チームの一員として出場し、8人1組で曲に合わせて約5分の演技を披露。予選、決勝ともフランスに次いで第2位となった。演技について「個人としては練習の成果を十二分に発揮できたが、チームとしてはバトンを取り損なうといった小さなミスが目立ち、優勝には届かなかった。その結果、団体演技の難しさという点で勉強になった」と、今大会を振り返る。同時に、「将来はプロを目指すが、まだバトントワリングはプロとして正式に認定されていないので、バトントワリングを世界中により普及させたい」と志す。＝石阪稔浩

たなか・ありさ／大阪・PL学園高卒、立命館大学立命館バトンチーム所属。世界バトントワリング選手権大会、ペア・ジュニア金メダル（01、02年）、ソロ・ジュニア銀メダル（02年）。05年、第1回WBFインターナショナルカップ、ソロ・シニア金メダル。

初の日本代表で銀メダル

ケガ乗り越え感動の舞台へ

青木 愛（競技スポーツ学科3回生）

シンクロナイズドスイミング
第11回FINAシンクロワールドカップ2006（9月17日、横浜）

メンバー全員で手を繋ぎ、祈るように得点を待つ。「日本、2位」のアナウンスが流れると同時に、緊張から開放された青木選手の目から、大粒の涙がこぼれた。「スペインに勝ててよかった。ホッとした。もしチームが負けたら、自分のせいだというプレッシャーがあった」。喜びよりも、実は、安堵の気持ちが強かったのだ。

というのも、これまで控えに回ることが多く、最終日のチーム、フリー・ルーティーンが初の日本代表デビュー。スペインに同点の2位に並ばれた午前のテクニカル・ルーティーンでは欠場したため、「もしチームが負けたら自分の責任」の重圧に襲われたのだ。

日本チームにも個人としても「絶対に負けられない」状況の中で迎えた午後のフリーでは、競技生活で初めて重くのしかかるプレッシャーと闘いながら、「練習で注意されたところを、一つ一つしっかりやろう」と、全神経を集中させ本番に臨んだ。

鮮やかな緑の衣装で登場。前半、たたみかけるような脚技で、日本が得意とする同調性をアピールした。スピン、リフト、ジャンプもきれいに決まり、ラストは花のような円陣でフィニッシュ。苦しい演技中、「銅（メダル）はイヤだ！」と思った瞬間を鮮明に覚えている。勝ちたいという強い思いで自己を奮い立たせ、最後まで集中力を欠くことなく演技を終えることができた。

W杯は五輪、世界水泳と並ぶ、世界3大大会の1つ。去年のモントリオール世界選手権では、代表に選ばれながらも5月のローマオープン後、肩を負傷したため出場できなかった。代表デビューのはずが、補欠続きの一年間を送ることに。その悔しさをバネに、W杯で代表を立派に務め上げた。今後、「代表として出場できたら、メダルをとれるように頑張りたい」と、まずは10月のロシア合宿に意気込む。＝大田裕子

あおき・あい／京都文教高卒、井村シンクロクラブ所属。小3からシンクロを始め、小4でジュニアオリンピック優勝。05年スイスオープンで、チーム・コンビネーション優勝。

総合型地域スポーツクラブBSC多彩な活動がスタート

今春発足した総合型地域スポーツクラブ「BIWAKO SPORTS CLUB」（略称BSC）の多彩な活動がスタートした。会員数は現在、280人。小学生が主だが、3歳の幼児から大人も含まれ、サッカー、陸上、バスケットボールのアスリートスポーツコースと、キッズスポーツ、親子ふれあい教室、健康増進ウォーキングなどのライフスポーツコースでの活動に取り組んでいる。指導や運営をサポートする「ボランティア・指導者バンク」には、本学の学生164人が登録、会員とのふれあいを通じて貴重な体験を積んでいる。

陸上スクールには15人の子供が参加、毎週土曜午後、大学グラウンドに集まってくる。主に陸上部員が、月に1種目ずつを指導し、「走、跳、投」の基本や種目ごとの魅力、特性を伝えている。子供たちからは「コーチや友達に会うのが楽しみ」という声や、「陸上の専門的なことを学びたい」など意欲の高まりをうかがわせる声も聞かれる。

毎週水曜放課後のバスケットボールには3歳から小学生まで15人が参加。ある保護者は「子供はBSCで友達ができて、進んで練習に行くようになった。」と話していた。

ライフスポーツコースの一つで、8月には比良げんき村で小学生を対象にしたキャンプがあり、野外スポーツコースの黒沢ゼミの学生たちが協力。BSCスタッフの一人、田渕亜実さん（4回生）は「スポーツ大学という特性を生かし、大学との連携をもっと強めていきたい」と話す。また、安田裕樹さん（3回生）は「今年1年は課題を探すのが課題という面があった。みんなでBSCの輪を広げて生きたい」と話していた。＝盛美香子、望月智子

バトミントン Badminton

部員は男女合わせて14人。京都学生リーグでは男子は3部で優勝し2部昇格。女子は2部で準優勝。

クラブの成長に一点集約

吉原 沙紀

必要だと思えばはっきり自分の考えを口にする。先輩の言うことにただ頷いていただけだった1年前には、見られなかった姿である。

普段は仲の良いクラブでも、時に上級生対下級生の構図に分かれることもあり、そのほとんどで下級生は意見を出せずに上級生に呑まれてしまう。バドミントン部も例外ではない。しかし、その溝を埋め、上と下とのパイプ役となって下級生たちの意見を聴き、自分が代表して先輩たちに伝える。「このクラブが成長するためですから」と笑って答えてはいるが、気苦労も多いだろう。しかし、そんな様子をみじんも感じさせないところに、芯の強さを感じる。

現在のクラブでの役職は主務。昨年まで4回生の主将が兼任していたが、今年から任された。同時に今年から学友会の役員としての仕事もこなす。「忙しすぎて、正直、いやになるときも…」と言いながらも、練習は怠らない。

「学友会を言い訳にしたくないのと、私がもっとうまくなれば先輩たちに迷惑をかけなくてすむから」と両立を心がける。そして、「せっかく先輩が任してくれた仕事だから」と主務の仕事にも強い責任感をもつ。

「クラブの成長のため」。インタビュー中、口にしたのは1度だけだが、思いはこの一点に集約される。大学創設時にクラブを立ち上げた4年生が抜けていくと、引き継ぐものが必要になる。近い将来、バドミントン部の後継者として部を引っ張っていくのは、他にいない。＝小田康人

（よしはら・さき　大阪・茨木西高校卒、2回生）

スキー Skiing

部員10人の専門はそれぞれだが、全関西学生大会、インカレには全員で出場。今期から女子も加盟。

スキーは「出会いのスポーツ」

小松 亜紀

「朝イチで滑れたら最高に幸せ」。快晴の日の朝一番に、独り占めできる誰もいないゲレンデは、言葉にならないほど美しい。高く、貫けるような青い空。連なる山々と、どこまでも広がる大自然。木の枝を覆う氷がキラキラと眩しく光る。

そんなスキーに魅せられて、タイムを競う競技スキーを始めて、今年で11年目を迎えた。

高校時代、一度もインターハイ予選を突破できなかった悔しさもあって、同志社大学でも4年間、スキー部に所属。同大4回生の時に出場した「学生アルペンチャンピオン大会」では3位に輝いた。さらに「今までスポーツに関わってきたが、スポーツについて学んだことはなかった」と、今春から本学に編入。商学部で学んできた経験を活かしながら、所属するマネジメント・情報コースで、「スポーツ」という新しい分野を、積極的に吸収しようとする姿が印象的だ。

スキーを「出会いのスポーツ」とも言う。これまでのスキー人生を「辛くしんどい時もあったが、その都度、色々な人に支えられてきた」と、振り返る。合宿や大会で出会った全国各地の指導者、ライバル、そしてチームメイト。「たとえシーズンが終わって離れ離れになろうとも、スキーをしている限り、いつかまた必ずどこかで会える」。

雪山を自由に駆けるように、2年間の大学生活を一気に駆け抜けようとしている。＝大田裕子

（こまつ・あき　京都・同志社女子高卒、3回生）

ソフトテニス Soft Tennis

部員数は男子7人、女子6人の計13人。現在は6部リーグに。練習は週3回。2部を目指す。

クラブ昇格さらに上へ

主将 谷口 善春

「今年の目標は、全員が2部に上がれるだけの技術を身につけること」と語る。

今の4回生が開学と同時にソフトテニス同好会を設立。「その頃から先輩は早くクラブにしたいと言っていた。だけど、半年から1年の同好会としての活動をしなければクラブにはなれないし、まず部員が全然足りなかった」。それが、今年度になりようやく叶ったのだ。

クラブに昇格して公式戦に出場できるようになり、部員も自分の競技レベルを確認できるようになった。現在のレベルは6部だが、3部で十分戦えると自負している。しかし、目標は3部ではない。

2部への壁は部員数と経験者の不足。現在の部員は男女で13人だが、半分以上が2回生。ソフトテニスは硬式テニスとは異なり、ダブルスでの心理戦が勝敗を分けると言っても過言ではない。ダブルスの前衛と後衛の組み合わせが重要になるが、今年は1回生がほとんど入らなかったため、ペアを見つけるのも難しい環境にある。「上に上がるためには、ソフトテニス経験者がもう少し入ってほしい」と語る。

中学からソフトテニスを始めて9年。個人としては昨年、地元のクラブチームに属して滋賀県2位となった実力者。ソフトテニスにかける情熱は誰にも負けない。

＝山田優子

（たにぐち・よしはる　滋賀・長浜高卒、3回生）

フットサル Futsal

部員数20人。滋賀県社会人リーグ1部。全日本大学西日本予選ベスト4。今期、9勝7敗2分。

1回生で次期主将に指名

内永 拓

大学からフットサルを始めた初心者の部員が多い中で、その一人であった1回生の時、早くも次期主将に選ばれた。

小学校の時こそサッカーをしていたが、中学と高校では陸上部に所属しており、大学入学後も一時は陸上部に入部した。が、「目指すものがわからなくなった」と陸上部をやめ、前から興味があったフットサル部に入部した。

「まさか1年で次期主将を決めるとは思わなかった」という最初の仕事は、「部員の意識を統一させること」だった。「3年の先輩たちは皆で部を立ち上げ、目指す方向性が一緒だが、僕たち2年はできあがった部に入った感じ」。部を創る苦労を知らない事が、そのまま先輩たちとの意識の違いになっている、と言うわけだ。

今までの練習では、目標が明確ではなく、今後はフットサルを楽しむだけの部にするのか、それとも滋賀社会人リーグ1位や関西リーグ1部を、全員が真剣に目標とする部にするのか。皆で話し合った結果は、次期主将が望んだ後者だった。

「あの話し合いをきっかけに、意識も変わってきている」と言い、次期主将として自分の考えを部員としっかり話し合い、実行させる点では、最初の仕事を全うしたといえるだろう。

しかし、主将の仕事はこれだけではない。立ち上げて間もない部の不安定な時期をいかに乗り切るかが、今後の部を左右する。今後も多くの問題がつきまとうだろうが、フットサル部を目標へと導いていけるのか。すべて、そのリーダーシップ如何にかかっている。

＝小田康人

（うちなが・たく　富山・水橋高卒、2回生）

サッカー Football

部員約190人。学生、社会人両リーグに各4チームが所属し、天皇杯本選出場を決めるなど活躍。

ピッチの内と外で常に前進

木村 直樹

サッカー部社会人チーム「HIRA」で1年間、ゴールキーパー（GK）としてチームを支えてきた。高校時代は金光大阪高でキャプテン兼GK。当時はGKコーチが指導に当たり、練習もスムーズに進んでいた。が、びわスポ大には学生コーチや監督はいるが、GKコーチはいない。選手が互いにボールを蹴って指導し合うという悪循環を改善しようと、自らGKコーチを買って出た。

コーチになったのは、それ以外にも理由がある。小学生の時から「恵まれた環境でサッカーをしてきた自分に出来ることは、今まで受けた指導を生かすこと」と話し、母校のサッカークラブ「金光大阪FC」で小中学生の指導にも携わっている。

今までは自分の受けてきた指導やメニューを選手に提供してきたが、これからは少しずつオリジナリティーも交えたメニューにしていくのを、目下の課題にしている。「指導者は選手にプレーのアドバイスや方法を与える情報提供者。選手にプレーの強要や制限をすることが指導ではない」。指導者としての様々な経験が、独自の指導法を生み出す。

コーチの立場になって気付いたことは、「人間性」の大切さ。常に100％の力を出している人は、いつでもその力を出し切ることが出来る。また、人を思いやり、やりたくないことでも真剣に取り組める人は、大切な場面で必ず力を発揮出来る。

そうした思いを胸に、ピッチの内外で、常に前進している。＝山本知可

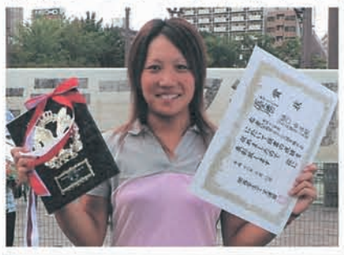
（きむら・なおき　大阪・金光大阪高卒、2回生）

テニス関西学生 樋口初優勝

関西学生テニス選手権（9月4―8日・大阪市靭）で、樋口由佳選手（1回生）が女子シングルス決勝に進出、加藤（関学大）を逆転勝ち、初優勝を飾った。

準決勝まですべてストレート勝ち、「もともと優勝できる力はあった」（植田実監督）が、決勝は立ち上がり硬さが見られた第1セットを3―6で先取された。しかし、第2セットを7―6で競り勝ち、落ち着きを取り戻した第3セットも6―2で連取。春の大会は決勝で敗れているだけに「リベンジを懸けて勝ちたかった」との思いが結びついた見事な逆転勝利だった。

「相手を意識し過ぎた日本インカレの反省を活かし、今回は相手を意識しないで自分の描いたイメージのテニスにチャレンジすることを心掛けた」のが勝因だという。植田監督も「春の悔しさをバネに粘り強さがついた、納得の結果」だった。＝山本知可



Campus Life

追跡シリーズ 部活①

どの大学においてもスポーツの「部活」は、キャンパスに集う青春群像にとって、4年間だけの大学生活だけではなく、心豊かで幸せな生涯に結びつく、未来への"跳躍台"。とりわけ「わが国初のスポーツ大学」では、幼き頃からスポーツに親しみ、卒業後はスポーツを通じた社会貢献を目指す学友たちが、より高度の専門性を求めて、「学びの実践」と自らの心身を鍛える場、でもある。

「より良きキャンパスライフ」を求めて展開する「追跡」シリーズ、今回はスポーツ大学にとって他大学以上に重みを持つ「スポーツ部活」の現状を検証しようと、まず指導者と練習環境について「追跡」してみた。しかし、世界を舞台に活躍する指導者が名を連ねる一方で、専門分野に高度な専門性を持った指導者がいない部や、キャンパス内に専用の練習場すらない部も少なくない実情が、浮かび上がった。

キラ星のごとく 超一流の指導者がいる一方で

専門知識を持った指導者わずか約3分の1

サッカー・松田保教授、陸上・渋谷俊浩助教授、硬式テニス・植田実助教授、女子バレー・吉田敏明教授……。学生課発行による「課外活動団体一覧」の顧問・監督・コーチ一覧を見ると、わが国スポーツ界で超一流の、「斯界の権威」とも呼べるトップクラスの実績と識見を誇る名前が、まるでキラ星のごとく連なっている。

しかし、大学から公認された20の部活（クラブ）のうち、今回の調査で回答があった14部で、「専任の監督やコーチがいる」と答えたのは、残念ながらともに5部（36%）に過ぎず、スポーツ専攻の単科大学として、物足りない結果となった。

1回生から4回生までがそろう完成年度の06年度を迎え、野球部に高橋佳三・監督が着任したのを初め、サッカーやテニスなどで専門的経験を持つ指導者が増えてはいる。だが、国内はもとより国際的な競技力が求められるスポーツ・体育系大学のレベルとしては、さらに専門的で高度なコーチング技術や戦術理論を有する人材が求められている。

例えば陸上競技でいえば、長距離を専門とする指導者として、福岡国際・びわこ毎日両マラソンを制した日本人選手3人の1人である渋谷俊浩助教授が開学以来、顧問・監督として陣頭指揮をとってきた。しかし、多くの体育系の伝統校が競って人材を求めている他分野の専任コーチは、本学陸上部では棒高跳びなどの一部を地域の専門的指導者に依頼しているのを除き、跳躍・投てきのフィールド種目、さらにはトラック種目でも短・中距離といった、専門分野ごとのコーチはいない状態が続いている。

専門あるいは専任の指導者がいない部活動は、主にチームの主将や学生コーチといった人物が、練習計画を初め大半の役割をこなしている。

8つの部が「練習場がないかあっても不十分」

「大学内に専用グラウンドがあるか」という質問に対しては、8つの部活動が「ある」と答えただけ。他の6つの部活動は専用の練習場がなく、開学4年目を迎えた今現在でも、不便な状況が続いている。

また、「ある」と答えた部でも、その広さや規模には満足していないのが現状。特にサッカー部では、部員が200人を超えるのに対し、キャンパス内にあるグラウンドは1つ。質的には全面人工芝の上質を誇るが、部員数が全学生数の2割を占める大所帯だけに、時間帯をずらすなどの工夫は行っているものの、キャンパスの外に練習場を求めるなど、練習用ピッチの確保に苦労しているのが現状だ。

また、京滋リーグ1部に昇格した硬式野球部では、学校近隣にはグラウンドはなく、大学から車で約20分から30分もかかる「アイアイグラウンド」（大津市小野）で練習を行っている。そのうえJR駅から徒歩なら45分はかかる山の中にあるため、電車での移動は不可能に近い。そんな中を、学生たちが、自分たちで車を都合し合い、移動している。が、これも厳しい学内の駐車制限や授業の時間帯がなかなか合わず、移動に苦労している。

そのほか、「バドミントンのコートを8面張れる所を6面しか張れないため効率が上がらない」「部室がほしい」「テニスコートが3面では少な過ぎる」などといった、施設に関係する不満が学生から多く聞かれた。

学生たちの安全のためにも

「練習場がない」「あっても狭い」など、大学内の施設に対する不満が多く挙げられた中で、さらに同じフィールド内で2つ3つの部活が一緒になって練習する光景を見ると、とても危険である。こうした危険な練習風景から、実際に野球部の学生が目にボールを当てケガをした事実もある。

また、室内競技でもバスケットやバレーボールなどの球技が練習場とするメーンアリーナでは、なんと雨漏りするため、「雨の日はフロアーが滑って危険」という声も聞かれた。何度か応急工事が行われたようだが、大きな事故が起こる前に、抜本的な対応が急がれる。

	専任監督	専任コーチ	学内施設の有無	主な練習場
サッカー	1	2 トレーナー1	○	マルチフィールドほか
ボート	0	1	×	琵琶湖
ラグビー	0	0	×	びわこフィールド
ソフトテニス	0	0	○	テニスコート
テニス	1	0	○	テニスコート
水泳	0	1	○	アクアセンター
ソフトボール	0	0	×	北比良グラウンド
女子バレー	0	0	○	マルチアリーナ
野球	1	1	×	アイアイグラウンド
スキー	0	0	×	
陸上	1	0	○	びわこフィールド
バスケット	1	1	○	メインアリーナ
アルティメット	0	0	×	マルチフィールド
バトミントン	0	0	○	メインアリーナ

びわこ成蹊スポーツ大学の「部活」　大学側は「課外活動」と呼称し、所属人数205人のサッカー部を筆頭に同4人の柔道部まで20部が公認されている「クラブ」。さらに同11人の車いすスポーツなど7つの「同好会」、さらに同22人の女子サッカーなど7団体が「サークルとして届けられている。05年度までの15に加え合計20となった。今回のアンケート調査は、06年度に新たに公認されたばかりの少林寺拳法やソフトテニス、体操など5部を含めた20のうち14の各部主将らを対象に、指導者の有無や練習環境、その他の改善してほしい事項を、書面で実施した。

［記者の目］

日本初のスポーツ大学だけに、スポーツ好きな学生が入学してくるのだから当然、部活動に入る学生も多い。それを予想して開学したはずの部活動環境は、とても厳しい。

サッカーや野球など、専門的な知識を持った指導者が付いている部活動は非常に少ない。大学生ということもあり、学生が指導する学生コーチの存在も当然必要であるが、その上に立って指導する指導者が明らかに不足しているのだ。

確かに専任で指導者を招聘すると予算面などでの問題も出てくる。それならコーチングコースであれば選択性にして、自分の専門の競技について科学的、且つ専門的な知識を学べる環境を作っていくのも、1つの手段ではないか。

その知識を部活でのコーチングに生かしていく。スポーツ大学であるのだから「授業で学び部活でそれを生かす」ということが大切なはずだ。無論これも大学内に、その競技に対しての専門的な指導者が必要となるのは確かである。

学生たちだけで学ぶのには限界がある部分も確かにある。大学側は専任の指導者を呼び、その指導者の下で学生たちが学び、コーチング指導ができるような環境を作っていくべきではないか。

スポーツ大学である以上、最高の環境で学生たちにスポーツ活動をしてもらいたい。

＝斉藤寛樹

支援と育成がスタンス

松井茂孝 学生課長

部活動の施設は、学校全体の施設を「施設設備・キャンパスアメニティ」という教官が中心となったワーキンググループが検討中だ。学生の意見を反映させ、今何を一番必要としているかを考え、優先順位をつけたうえで行動に移すことになるだろう。

むろん雨漏りの問題が発生しているメーンアリーナなど、授業で使うところは優先的に考えられる。部活は課外活動と位置づけ、各々の部が自主的に運営し、大学側のスタンスは支援と育成だと、考えている。

女子 バスケットボール Basketball

部員数38人。今年は下位リーグで3戦全勝、最終結果は9位でリーグ戦を終えた。

最後のリーグ戦で有終の美を

副主将 西本 智香

1年次では3部リーグの最優秀選手賞、2年次では2部リーグのスリーポイント王と、常にチームの中心選手として活躍してきた。が、昨年のリーグ戦ではケガに泣いた。リーグ中盤からすべての試合に出場出来ず、ベンチからチームメイトが頑張る姿を、ひたすら眺めるだけ。チームは何とか2部残留を決めたものの、目標の「インカレ出場」にほど遠い結果だった。彼女自身も2年連続で獲得していた個人タイトルが、昨年はどの部門も取れなかった。

その分、今年こそ「リーグ戦の全試合に出場して活躍する！スリーポイント王のタイトルを奪い返してみせる」と、個人的な目標を明確に語る。チームとしても、「2部で優勝することはあくまで通過点に過ぎない。1部のチームを絶対倒してインカレに出場する」と、強気の姿勢を見せ、闘志を燃やす。

将来は教員になって、バスケと関わっていきたいと考えている。教員採用試験に向けた勉強のため、バスケに費やす時間がどうしても少なくなる。「両方とも」という気持ちは強いのだが、大学生としてバスケのリーグ戦に出場するのは今年で最後。それだけに、大好きなバスケに自然と気持ちが入ってしまい、多忙な合間を見つけては練習に励む。「〝びわスポ大らしく〟をモットーに勝ち進み、大学生活を有終の美で飾りたい」と、力強く締めくくった。

＝井上高宏（にしもと・ちか　兵庫・甲子園学院高卒、4回生）

少林寺拳法部 Shorinji kempo

今年9人で創部。滋賀県民大会一般段外組演舞、単独演舞で優勝。関西学生男子段外組演舞で6位。

1番になる難しさへの挑戦

主将 濱田 侑希

「少林寺の部をつくるためにこの大学を選んだ」。大学生活を少林寺拳法に捧げようという意気込みが伝わってくる。

少林寺拳法は日本が発祥の地で、空手や柔道とは違ってあくまで護身術。心身を鍛える事が目的である。「始めたのは高校1年の時、先輩の演舞を見て、同じ人間とは思えないくらいカッコよかった。少林寺を始めて精神的にも強くなれたと感じるし、何より自分に自信がついた」。そんな少林寺の魅力を広めるために、「将来は教員になり、少林寺の部を強くしたい。なければもちろん作る」と力強く語る。

部を立ち上げるにあたって大変なことはたくさんあった。去年までは部員が3人しかいなくて同好会だった。経験者は自分だけ。コーチもいない。今年に入って部員が9人に増えたが、今度は逆に目が行き届かなくなってしまった。

しかし「大変だったがつらいと思った事は一度もない」。とあっさり言い切る。今年、同好会から部に昇格したばかりだが、積極的に試合にも参加している。

「マイナースポーツだから、簡単に上り詰めることが出来ると思われがちだが、どんなスポーツも1番になることの難しさは変わらない。1番と2番では全然意味が違ってくる」。と日本一を目標に掲げる。まだ始動したばかりのびわスポ少林寺部だが、やる気は他のどの部にも負けていない。＝田守由衣（はまだ・ゆうき　兵庫・報徳学園高卒、3回生）

女子 バレーボール Volleyball

部員26人。創部後、関西学生リーグの9部からスタート。06年秋季リーグでは5部に挑戦する。

ピンチの時こそ頼れるエース

逸見 優紀

プレースタイルは「素直」。「基本に忠実で、まっすぐで、セオリー通りだ」と周りは評する。

出身は兵庫の強豪、氷上高校。寮に入り、3年間バレーボール漬けの日々を送った。厳しい監督に基本をたたきこまれ、レシーブひとつにも細かく指導される。よく言えば、基本に忠実、悪く言えば、型にはまったバレーボール。「バレーボールをやらされている」と、思った。おかげでチームは勝ったが、「自分で考える」ということをしなかった。

この大学には「思いっきりバレーボールをしに来た」のだ。何から何まで全てを与えられてきた高校時代とは反対に、今度は、トレーニングから試合運びまで、全て自分たちで考える日々。試合ではエースを任され、思いっきりバレーボールを楽しんでいる。

エースに周りが求めるのは、「ピンチの時に決めてくれる事」だという。チャンスの時に決めるのは当たり前。ピンチの時に決められるエースは心強い。人一倍「基本に忠実で、素直で、バレーボールのセオリーを知り尽くした」だけに、相手にとって嫌なプレーも知っているはずだ。

今後の目標は「勝てそうで勝てない相手に勝つこと」。最近では、レシーブ力がついてきて、今まで落としてきたボールが上がるようになってきた。次の目標は、それを決める。

プレー同様に性格も素直だから、先輩の助言も素直に吸収し、もっとうまくなっていきそうだ。＝岩田萌（へんみ・ゆうき　兵庫・氷上高卒、2回生）

柔道 Judo

部員数5人。現在は何よりも部員数を増やし、団体戦に出場することが最大の目標。

見えてきた「柔道の理屈」

高橋 利予

「郷里に帰って子供たちに柔道を教えるのが夢です」と、ひとみを輝かせる。

小学一年から柔道を始め、12年間も続けている。一度も辞めようと思ったことはない。期待に胸を膨らませ、びわスポ大に入学。しかし、柔道部員は主将一人だった。

今は部員も5人に増えたが、練習は全員が揃える時間に合わせるため、週2回の時もある。環境は決して恵まれているとは言えない。

そこで、少なからず変化が生まれる。高校までは、相手に合わせ、受け身になってこなすだけだった練習。大学では限られた時間の中、自ら考え、技や動きをイメージするようになった。それにより、「柔道の理屈」が見えてきた、と言うのだ。

柔道は技の種類が豊富である。背負い投げにしても、教科書通りの投げ方だけでなく、自分に合った技を開発していき、相手の呼吸を計り、仕掛けた伏線に相手は予想した通りに動く。その、一瞬のスキを突き、数秒前のイメージ通りに技が決まる。「それが柔道の魅力」と言い切る。伏線の引き出しが多いほど、「理屈」がわかっていると言える。

しかし、体で習得しつつある「理屈」を、まだ言葉としてうまく伝えられない。言葉という道具に置き換えて表現できるようになったとき、柔道の指導者としての階段を一段登ることだろう。今は何よりも、部員数を増やしたい。

将来、実家の整骨院を継ぐ予定で、卒業後は専門学校に通う。故郷に戻ったら、少年団で柔道を教えようと考えている。＝千田遼坪（たかはし・としよ　福井・鯖江高卒、1回生）

水泳 Swimming

部員14人。梅園由貴（1回生）が女子100、200バタフライで創部以来初のインカレ出場を果たす。

マネージャーになって発見したこと

細見 綾乃

「忙しさに追われる事を〝楽しい〟と感じるようになったのはつい最近のこと」と語る。

成り行きで引き受けた(財)日本水泳協会学生連盟（以下、学連の仕事を受け持つマネージャー役。選手と両立させるつもりだったが、思ったより忙しく、プライベートな時間はもちろん、練習時間までも奪われた。朝5時起床から帰宅の夜10時まで、ほとんど部活のための生活なのに、練習時間はリレーのアシスタントとして参加するぐらいしかとれない。

親がコーチだった影響で始めた水泳歴はもう20年になる。人生のほとんどを水泳に費やしてきたが、選手生命を絶たれるに等しい状況に陥ってまで学連の仕事に打ち込んだのには訳があった。忙しい生活の中で、多くの人との出会いがあり、裏方の事情を知り、理解した。選手を気遣い、部活の雰囲気をつくるマネージャーの仕事に、魅力を感じるようになったのだ。

「他の部員の顔を見て気づいてあげられることや、苦しい時に支えになってあげられることがある。マネージャーだから出来る、今までとは違う目線での部活。それも楽しいと思うようになっている自分を発見した」という。

選手とマネージャーの両立は大変だが、今はそれを充実に変えて、部活をいきいきと楽しんでいる。＝田守由衣（ほそみ・あやの　兵庫・夙川学院高卒、3回生）

ソフトボール Softball

1・2年生11人の活気溢れるチーム。今秋の関西リーグ戦で2部に昇格、来春は1部を目指す。

競技への夢、再び輝き出す

主将 奥村 まゆみ

小4から野球を始め、地元の中学でソフトボールと出会い、高1でインターハイ出場、近畿大会2位の成績を収めた。

卒業後は実業団でのプレーを考えていたが、声がかからなかった。ならばと、かねてから頭の片隅で思い描いていた体育教師への夢を新たにし、スポーツ大学進学を決めた。競技を続けようとは思っていなかった。

部員数も練習環境もほとんど整っていなかったソフトボール部。先輩からの熱烈なラブコールに押し負け、仕方なく「遊び感覚でやろう」と入部を決めた。本学初参加となった去年の春季関西学生3部では、3試合中2試合が人数不足による不戦敗、リーグ最下位で幕を閉じた。その後入部した仲間たちと猛練習し、秋季大会と今年の春季大会では3部優勝。しかし2部への壁が感じられた。「チームの先頭に立ち、強くなって上を目指したい」と主将を引き受けた。

今年、新入部員が6人入り、層が厚くなると、勝ちたいという熱い思いがチームにみなぎり始めた。「授業の関係で毎回の練習に出てくるメンバーが違うため、少しずつ練習内容を変えたり、新しいメニューを取り入れたりする。悩むこともあるが、みんなが練習に対する率直な意見をぶつけてくる」と話し、部員一人一人が前向きで積極的な態度に力づけられている。

一度は終止符を打ったはずの競技人生。11月からの新人戦に向け、再挑戦はまだ始まったばかりだ。＝大田裕子（おくむら・まゆみ　滋賀・大津商業高卒、2回生）

硬式テニス Tennis

部員数は男女合わせて22人。練習は日曜を除く週6日。11月には女子の全日本選手権の予選も。

関西王者　目指せ全国制覇

高屋 桃絵

去年、日に焼けた、はにかんだ笑顔の彼女の写真と「高屋桃絵さん優勝!!」の文字が躍るポスターがキャンパス内に張り出されていたのを覚えている人は多いだろう。

新進テニストーナメントで優勝し、関西の1・2・3年生でトップに立った。彼女の強さはどこにあるのだろうか。

高校時代には京都ジュニア選手権で優勝、関西ジュニアベスト8、全日本ジュニア・世界スーパージュニアともにベスト16入りという華々しい成績を収めている。大学入学後もよい監督に恵まれ、将来的には実業団入りを目標としている。

「そのためにはもっと自分に厳しく、はっきりと自己主張できる自分をつくっていかなければ」と答えた。

去年の優勝者として受け身な立場にならざるを得ないが、「チャレンジの気持ちで戦わなければ今年の優勝は望めない」と自分に言い聞かせる。

今年の目標は、全日本選手権での優勝。11月にその予選が迫っている。彼女のチャレンジはまだ終わらない。

＝山田優子（たかや・ももえ　京都・北稜高卒、3回生）

訂正

第1号の「Biwako Sports Club」の記事中、「山田佳司」野洲高監督とあるのは、「山本佳司」、また、「学長賞」の記事中、「藤村裕子」とあるのは、「藤村祐子」の誤りでした。

男子 バレーボール Volleyball

部員16人。06年秋季の関西学生リーグで3部に昇格。また、西日本インカレなど高いレベルにも挑戦。

「リベロ」に懸ける熱い想い

南部 伸哉

中学校からリベロ一筋。リベロとは攻撃参加しない守備専門の選手のことだ。高校ではインターハイにも出場した。長年のポジションには、かなりの思い入れがあるようだ。

一番心掛けていることをきくと、「ミスをしないこと」と、言い切った。それは、スポーツ選手にとって究極の目標でもある。ミスが皆無の選手など、いない。攻めることができないリベロというポジションだからこそ、ミスをしないプレーが最高のパフォーマンスなのだ。地道にボールを上げ続けることが、時に華々しく点を決めることよりも観客を魅了する。

では、ミスとは何か。「練習で出来るパフォーマンスが、試合で出来なかったとき」だと、これも躊躇することなく答えが返ってくる。毎日の練習で意識している証拠だろう。

リベロというポジションは、1試合に何度もコートを出たり入ったりするため、外から冷静にプレーを見ることができる。また、中に入るときに、盛り上げ役を担う一面もある。目指すリベロは、そんな盛り上げ役だ。声だけでなく、プレーで試合を盛り立てる。

びわスポ大を選んだ理由は、バレーボールだけでなく、スポーツの勉強のため。将来は「トレーナーになりたい」という。大久保先生のゼミに入り「スポーツ選手だけでなく、一般の人もみられるようなトレーナー」を目指している。

目標をはっきりと見据えて、日々突き進んでいる。＝岩田萌（なんぶ・しんや　徳島・城東高卒、3回生）

野球 Baseball

部員は50名。京滋大学野球連盟1部リーグ所属。前季は5位。最大の目標は神宮大会優勝。

志強めた甲子園経験

田中 勇気

トレーナーへの志の高さに驚かされる。

高3夏、甲子園に外野手として出場、ベスト16という輝かしい成績を残している。大学でも05年度秋季リーグでは規定打席に達するなど活躍した。

だが、「選手を続けたい」という思いとの間で葛藤はあったものの、早くからの夢であるトレーナーになるため、思い切って選手を断念した。

中学生の頃からケガに悩まされ、自分の周りには体のケアをする人が少ないことに気がついた。「自分と同じ思いをさせたくない」。そこからトレーナーを志す気持ちが生まれた。

夏の甲子園では、選手の傷害予防を目的とした取り組みのため、試合後のストレッチやケガへの対処など、理学療法士が関わっている。彼らの仕事ぶりを見て、「より一層、トレーナーへの思いが強くなった」と話す。

将来の目標は「プロ選手のトレーナー」に照準が定まった。卒業後に専門学校へ進み、柔道整復師の免許取得を目指す。そして、その後はトレーナーの派遣会社に所属し、実践でより経験を積んでいきたいというのが、人生設計の見取り図だ。

今は野球部のトレーナーとしてだけでなく、地域密着型のTSC（高島スポーツクラブ）でも活動している。野球部をはじめ、すでに多くの人にとって必要な存在となっていながら、なお目標に向かって邁進する姿が、そこにある。＝大西亮暢（たなか・ゆうき　岡山・倉敷工業高卒、3回生）

飛翔 プロへ 世界へ

BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE The Road To VICTORY

Jリーグ 神戸 びわスポ大 初のプロ誕生

情熱の男 近藤 岳登(競技スポーツ学科4回生) 期待を力に

びわこ成蹊スポーツ大学から初のプロ選手誕生。オファーがあったのは8月下旬だった。神戸以外にもジェフ千葉（J1）と湘南ベルマーレ（J2）から練習参加の誘いが。しかし、3年時から練習に参加していた神戸の、スカウトの熱意に引かれ決断した。

4年連続関西学生選抜、関西学生リーグ1部大会優秀選手に選出され、実績は十分。「プレーの長所は、なんと言ってもスピードと1対1の強さ。FWとしての技量はすでにプロ並みだった」と、顧問の松田監督はプロ入り後の活躍に太鼓判を押す。また、球団からはストライカーとしてだけでなく、チームを積極的に引っ張っていく、ムードメーカーとしても期待されている。

直近の目標はもちろん、2010年南アフリカW杯出場だ。近藤選手は「応援してくれる人のためにも活躍したい。自分の活躍する姿をみせることで、夢を追うことのすばらしさを伝えたい。夢と情熱は年をとらないから」と熱く語る。

この言葉通り、「夢と情熱の男」だ。サッカーへの熱き思いを「ワンワールド・スルー・サッカー」（サッカーを通じて世界を一つに）と表現。プロサッカー選手は「子供に夢を与える職業」と確信し、「青年海外協力隊に応募し、世界中でサッカーを教える」という夢を描く。その夢実現のため、高卒で一度は社会人リーグに所属したのを「協力隊に入るには大卒が必要」と本学に入学した。

その口からは「一般の社会人よりも人間的に大きくなりたい、成長したい」、「常に何かに飢えている、常に一番でありたい、ビックなことを言える自分でありたい」……プロ選手としては頼もしい言葉が次々に飛び出す。

プロ入りに伴い、大学を中心にファンクラブの設立が計画されている。期待してくれる人の応援を心に深く刻み込み、まず世界最高峰の舞台・W杯への挑戦が始まる。最後の言葉は、「期待は良いプレッシャーになる」――。

＝千田遼坪

突破力とスピードと

一瞬にしてDFを切り裂くドリブルで、プロの壁を打ち破った近藤岳登選手。その強靭な体躯とスピードだけでなく、何事にも失敗を恐れずに挑み続けたガッツがプロ入りの原動力となった。

こんどう・がくと／愛知産業大学三河高校を卒業し、大阪体育大を中退。愛知社会人リーグチーム東海理化を経て本学へ。関西学生リーグでは2部と3部で得点王、1・3部大会優秀選手。さらに4年連続で関西学生選抜に選ばれた。

アルティメット Ultimate

部員は男子21人、女子18人、練習は週3回。06年全日本学生選手権、二次予選に男女進出。男子10位、女子8位。

どん底から救ってくれた競技 松倉 正宣

「こんなにも、アルティメットに夢中になれるとは、思ってもいなかった」と、どこまでも屈託のない表情で語る。

アルティメットは大学から始めた。以前から興味は持っていたが、大学と社会人にしかないスポーツ競技のため、大学から始めても十分にトップを狙える、と考えたから。

ところが、入学して2年がたとうとする頃、長距離の電車通学による腰へのストレスから、椎間板ヘルニアに見舞われた。そのため、通学が困難となり、講義を欠席しがちとなる日々が続く。自主退学すら考えるようになる。

だが、競技を通して運動をする事が、腰にリハビリ効果があると知る。放課後に、天然芝で夜遅くまで行った練習。64メートルもの距離を、何時間、何往復と、フライングディスクを投げては走り、その運動量は想像以上に厳しい。

ハードだが、風の影響を受けながらも、自由自在にディスクをコントロールし、意のままに味方へパスする。自分のスローで得点したら、なお一層気持ちがいい。そこには、再びアルティメットに熱中する自分がいた。

だから、アルティメットは、やめない。退学もしない、と決めた。

「もし、別の競技を選択していたら、大学に残ってはいなかっただろう」とまで、言い切った。＝石阪稔浩（まつくら・まさのぶ 大阪・東淀川高卒、4回生）

男子バスケットボール Basketball

部員数44人。三宅、伊戸が06年の2部関西選抜に選出。今年は2部リーグ優勝と1部昇格が目標。

選抜経験をチームに伝える 三宅 良昌

「びわスポ大初の選抜選手に選ばれて嬉しい」。バスケットボール部創部以来、初の関西2部選抜選手に選ばれ、顔をほころばせる。昨年の2部リーグ戦での活躍が評価されたのだ。

小学生の時は野球をしていたが、肩を悪くして断念。バスケットを始めたのは、中学で友達がしていたのがきっかけ。じきに頭角を現し、高校3年時には大阪府の国体選手にも選出された。身長183センチ、体重80キロの恵まれた体格と多彩なプレーが持ち味だ。

「選抜されて高いレベルでバスケットができ、良い経験になった」と話し、自信をつけているように見えた。選抜チームの初めての顔合わせでは、チームプレーがうまくいかないことが多かったという。しかし、能力の高い選手が集まっているだけに、呼吸を合わせるのも早い。「コミュニケーションがとれないと、思うように個々の能力を生かしきれないことを感じた」と言う。「選抜チームで学んだコミュニケーションの大切さをチームに伝え、今年のリーグ戦に生かしていきたい」と語る。

チームは昨年、2部で3位と惜しくも1部昇格を逃した。今年は1部昇格を目指し、一段とレベルアップしたプレーを見せてくれることだろう。

「夢はバスケットの本場アメリカでプレーをすること」と語り、さらに大きな目標に向かってまっしぐらだ。＝伊戸重樹（みやけ・よしまさ 大阪・四条畷北高卒、3回生）

ラグビー Rugby

部員16人。週3回練習。06年度から15人制の関西学生リーグに登録し、最下位のDリーグからスタート。

花園優勝の強気と責任感 栗本 玲

高校ラガーマン憧れの舞台、大阪は花園グラウンド。そこに伏見工業のレギュラーとして立ち、高校最後の冬の全国大会で、見事に優勝を成し遂げた。

周囲は関西や関東のラグビー有力校への進学を予想した。が、「ラグビーは野球やサッカーと違って日本にプロリーグがなく、将来をラグビーだけで考えることは難しい。大学ではラグビー以外の知識をたくさん身に付け、卒業後は保健体育の教員になりたい」と、びわスポ大に進学した。

びわスポ大の部員の大半は、大学からラグビーを始め、まだまだ経験は浅い。今までは13人制の日本代表に選ばれている大藪弘佑選手がチームを引っ張ってきたが、技術指導のコーチが不在なことなど、不安要素は多い。しかし、10月から関西の学生リーグ戦に初参戦することが決定しており、それに向け、日々の練習で成長を図る。

今年は4部リーグからのスタート。「まずは全勝優勝して3部リーグに昇格する。4部リーグでは自分が活躍するのではなく、アシスト役に徹し、周りの選手に点を取ってもらう。それで、周りの選手にいい思いをして欲しい」と、下級生とは思えない強気と責任感を見せる。

チームの大黒柱でもある大藪選手と共にプレイするのは、今年のリーグ戦が最初で最後。来年以降のリーグ戦は、大藪選手が抜けた穴を彼がどうやって埋めて行くか。全国優勝の華々しい経験が、チームに果たす役割は大きい。＝井上高宏（くりもと・れい 京都・伏見工業高卒、1回生）

北京へ限りない自信が

カヌー／カナディアン／フラットウォーターレーシングW杯第3戦（9月、中国・広州） 竹中一生（競技スポーツ学科3回生）

出場全4種目のうち3種目で決勝進出、とメダルまであと一歩。自身も驚きの好成績を収めた。

専門の1000メートルシングルでは、予選から全力で挑み上位通過。決勝レースは強豪のロシア選手の隣に。スタート直後からみるみる離されて、その激しい波が襲いかかったため、「自分のレースができなかったが、次に繋げるために敢えて挑戦した結果だから、まったく悔いはない」と納得の表情だった。

周囲を唖然とさせたのが、ペア決勝。現地入りして初めて組んだ即興ペアだったのに、思いもよらぬ快走を披露した。ペアの相手は200メートル専門のスプリンター、さすがのスタートダッシュで一気に飛び出すも、エンジン切れ。そこに竹中選手の強靭なスタミナが加わり、隣のレーンがまたもロシア選手だったこともあって、気迫に満ちた2人は、強豪相手に屈せず序盤からつけたリードをそのままに、終わってみれば5位。素晴らしいレース展開となった。前はエンジンと舵を兼ね、後ろは舵の役目をする2人乗り。「うまくバランスがとれた」のだという。

念願の舞台で限りなくメダルに近づいた。

すべての決勝は同日中に行われたにも関わらず、フォア決勝では両種目とも4位につけ、「持てる力を悔いなく出し切れた今大会」となったが、次なる目標は当然、来年の世界選手権、そして2年後に迫った北京五輪。「念願だったW杯入賞という成果が北京に向けて大きな自信になった。大学内外で多くの方々から募金や励ましをいただき、感謝しています」と、爽やかな言葉が返ってきた。＝大田裕子

たけなか・いっせい／陸上自衛隊に6年間所属。東海大学を卒業し、滋賀県カヌー協会を経て本学に編入。97年世界ジュニア、98・99年世界選手権、03年ドイツW杯出場。

障害者も楽しむ究極の生涯スポーツ 田村 莉絵

ボート Rowing

部員は5人だが、大学に練習のための設備が無く、各々が社会人のクラブチームで活動している。

初めてボートに乗ったのは高校生の時。大学入学後もボート部に入った。本来なら部員と共に漕ぎたいところだが、大学には設備がなく、活動したくてもできないのが現状。だから、滋賀県内のクラブチームに所属している。そこでは下は小学生から上は70代の高齢者まで、幅広い年代の人々が生き生きとボートを楽しんでいる。他の部員も各々が違うクラブチームに所属し、活動を続けている。

大学では、地域スポーツコースの金田ゼミに所属し、障害者スポーツを専攻。昨年、岐阜県で行われた世界選手権で、障害者ボート競技のボランティアとして参加した。日本人選手の参加はなかったものの、2週間、選手と同じ宿舎に泊まり込み、公式練習の手伝いやスケジュール管理などをサポート、選手を裏で支えた。時に自分の英会話能力のなさを恨みつつ、辞書を片手に戸惑うことも多かった初めての体験だった。

大会を通じて、日本でボート競技が普及していないことを痛感した。海外と比べてもまだまだというのが現状だが、世界選手権を機に日本でも障害者ボートの協会が設立され、徐々にだが力を入れ始めている。

70代の高齢者でも競技できることから「ボートは究極の生涯スポーツ」だと言う。競技はマスターズなどの年代別にも分かれているため、年齢に関係なく楽しめる。「今後は障害者ボートに関わりつつ、もちろん自身の競技としてのボートも続けたい」と熱く語る。＝小田康人（たむら・りえ 京都・伏見高卒、4回生）

迷惑駐車と学生のマナー 地域住民との共存

開学から4年目を迎え、学生数も1000人を超えた。周辺住民からは「大学の開学で若者が増え、地域に活気が出た」との声だけでなく、地域の日常生活に与える「負」の部分も年々、増えているようだ。去る7月には、キャンパス西側の「大陽台団地住民一同」（約30世帯）から、「学生の迷惑駐車問題」などに対する「お願いと申し入れ書」が出された。実際に周辺を歩いて駐車状況を確認し、地域の声を聞きながら、自動車通学の是非を考えてみた。

違法駐車ではないが…

キャンパス周辺の主な駐車状況は、国道から同団地に入った「びわこゲート」付近に10台前後と多く、比良川の周辺に5～6台、食堂周辺に4～5台。他にもプールの横やJR沿いなどにも見られた。いずれも道路は駐車禁止ではなく、大半が無余地違反となる幅員3・5メートルはあるため、すべてが違法駐車ではない。

しかし、同団地の住民たちは、「この辺は高齢者が多く、いつ救急車などの緊急車両が通るかわからない。一刻を争うときに駐車している車があると、取り返しのつかないことになる」と口をそろえる。また、日帰り老人ホームのデイサービス送迎車が行き来しているが、曲がり角の辺りに車が停まっていると通行が困難になるケースもあるという。

また、びわこゲートから国道161号線へ向かう道路でのスピードオーバーの問題もある。「交差点での出会い頭でぶつかりそうになったことが多々ある。一時停止を意識し、スピードを緩めて欲しい」。実際、びわスポ大生ではないが、今年に入って3～4件の接触事故が起きている。

駐車スペースが少ないために

車通学は、学生便覧・学生生活規則で、基本的には不許可。練習場が遠い野球部やソフトボール部、あるいは怪我をしている学生等が、特別許可を得て通学している。

創設1、2年目は、約210台分の駐車スペースが確保されており、免許を持っている学生も少なく、特に規制はせずに通学を認めていた。ところが、3年目に入り学生が3学年に増え、許可制に。通学距離で制限を設け64台を許可。4年目では、新校舎の建設もあって駐車スペースが大幅に減少し、基本的に不許可になった。

現在、京都府・滋賀県45の大学のうち、9校だけが車通学を認め、管理方法は許可制。大半が認められていない。ネックになっているのは、駐車場の確保のようだ。びわスポ大でも、近隣の駐車場を借りている学生もいる。

大学に求めるだけでなく、学生の自覚が必要

大学側は、対策の一つとして、後期から学友会と協力し近隣の見回りを始める。今のところ、車通学も原則禁止の見通しだ。

それだけでなく大学には、駐車場の充実が急務だ。開学当初に認めていた分、責任を持って対応すべきではないか。学生にもマナーの向上が求められる。車や喫煙についての苦情電話が頻繁にあるため、今後、学生一人一人が自覚をもった行動をとらねばならない。地域密着を目指す大学として、真価が問われる。＝千田遼坪

体操 Gymnastics

部員は4人、練習は週7回。06年全日本インカレ2部に、主将の小井出和が出場。総合45位。

命を懸けて得られる魅力 主将 小井出 和

体操競技の魅力とは？「一つのミスが命取りとなる、ハイリスクな技への挑戦。その恐怖心を越えて、得られる“達成感”。そして、自分と相手の成功を、共に喜び合う“共感”です」と笑顔で語る言葉に、よどみはない。体操をする上で大事なのは、緊張と恐怖をはね返せる、その精神状態を維持する事だという。

体操の魅力に触れたのは、幼い頃に母からマット運動を教わり、一つの運動の達成を共に喜び合った時。さらに、小学1年生では、体操教室で出会った指導者や仲間と互いの練習の成果を共感し、より体操にのめり込む。しかし、高校では「あの人よりも…」という競争心、周囲の過剰な期待。プレッシャーが重荷となり、無理をしたためケガをする。

大学へ入ると、体操競技部はなかった。そのため、自ら部活を立ち上げる。施設、器具、部員数、どれをとっても決して十分ではない。日々の練習、試合では戸惑いの連続である。だが、現状に屈せず「体操競技を盛り上げよう」という前向きな意志と、「体操が好き」という素直な心情を支えにし、日々のトレーニングに励む。その結果、3年目にして、ついに全日本インカレの出場権をつかんだ。

主将としての目標は、競技成績の向上は二番目。部員を増やし、体操競技をより盛り上げる事が一番だという。将来は、選手のメンタルをサポートし、不安要素を除去したい、体操の魅力を競技者に感じてもらいたいと、指導者を志す。

何よりも、自分が体操をして、楽しむことが好きなのだ。＝石阪稔浩（こいで・のどか 大阪・宣真高卒、3回生）

陸上競技 Track and Field

部員数95人。06年度日本インカレで女子10km競歩沢田選手が5位、女子棒高跳び堀選手が7位。

周到な準備で屈辱晴らす 沢田 美紀

ラスト1周。場内の大スクリーンに、観客の歓声と拍手を浴びた自分の歩く姿が映し出された。これまでの選手生活ではなかったこと。そしてゴールすると、かたわらで歓喜する渋谷俊浩コーチの姿を目にして、「自分自身も、納得いくレースが出来たことを確信した」という。

これが2回目の日本インカレ。今年から距離が5キロから10キロへ伸びた。この距離倍増を見据えた対応策として、ロードでの練習量を増やして距離への抵抗感をなくすと同時に、ペース配分やフォームの改善にも取り組み、初のロード10キロ競歩に挑んだ。なにしろ昨年は3回もの忠告を受け、途中で失格。とても悔いの残る結果となった。それだけに今年のレースは、結果にこだわっていたのだ。

コースは競技場外の周回コース。持ちタイムでは入賞できる位置にいた。レース展開は渕瀬選手（興全大）が飛び出し、後ろの集団にいたが、途中から積極的に前に前に順位を上げていき、「完歩達成」。1年越しの結果が得られた。

競歩を始めたのは高校生の時。学校対校戦で得点かせぎとして顧問の先生に勧められたのがきっかけだった。が、すぐに著しい成長を見せ、高校時代は国体少年Aの部2位という成績を残した。

日頃の練習では走ることも練習に取り入れ、「歩」・「走」ともに競技での向上をはかっている。＝望月智子（さわだ・みき 福井・敦賀気比高卒 2回生）

己に克ち狙うは記録更新 堀 さやか

雨が降りしきる中、3メートル50から始まった「自分との闘い」は、3メートル75で上位8人に絞られた。これが最後となるインカレ出場。しかも今季の堀選手は、昨季に樹立した関西学生記録（3メートル90）の更新に期待が高まるのとは裏腹に、春先から記録が伸び悩んだ。そのうえ関西インカレでは、我孫子智美（同大1回生）選手に、目の前で記録を塗り替えられる屈辱を味わされてもいた。

それだけに、気持ちを新たにして3回目のインカレに臨んだではいたが、3メートル80に上げられたバーを3回とも越えられず、「自分の跳躍で学生時代の集大成を」という特別な思いは、無情な雨とともに散った。

「7位」。順位と記録は決して満足のいくものではなかった。が、「現在の自分」を、冷静に受け留める堀選手の姿が、試合後のピットにあった。

棒高跳びと出会ってから、わずか4年足らずで関西学生記録樹立まで駆け上がった、「練習量では誰にも負けない。猛練習が試合での集中力を持続させる」との固い信念が、「明日」への強い支えなのだろう。

なにしろ平日で五時間、土日で八時間も走りこみと跳び込みを続けてきた。

並大抵の努力ではない。棒高跳びは、自分の跳躍を除いては、待ち時間とてつもなく長い。その間、自分の出番に合わせて、集中力を持続させなければならない。この難しいメンタル面での切り替えを乗り越えてきた。その自信が明日への活力となるのは間違いない。

今季の目標は、「まずは己に克ち、学生記録の更新」。再び大空に舞うその姿には、間違いなく北京五輪が待つ。

＝望月智子（ほり・さやか 京都・西京商業高卒、4回生）